## 香川県埋蔵文化財センター 展示

# 弥生土器のミカタ－土器から読み解く弥生人のくらしと交流

遺跡の発掘調査では、むかしの家の跡や使っていた道具などが多く見つかります。考古学ではこれらを手がかりとして、かつてのくらしや歴史を明らかにしていきます。発掘調査で見つかる道具には、様々なものがありますが、特に多いのが土器です。これは土器がくらしの主要な道具として使われてきたためであり、土器の種類や使い方を調べると当時のくらしぶりが見えてきます。また、土器は時間の経過とともに、形や装飾、作り方などが変化してきたため、遺跡の年代を判断する上で重要な手がかりとなります。このように土器を調べると、当時のくらしぶりやその年代を知ることができるため、考古学では土器の研究が大切なテーマとなっています。

今回の展覧会ではこうした土器のうち、香川県内で多く見つかっている弥生土器に次の５つの観点（見方）から注目します。

**ミカタ１　土器のうつりかわりとくらし**
**ミカタ２　土器の用途（ようと）とくらし**
**ミカタ３　讃岐（さぬき）へ運び込まれた土器から見た交流**
**ミカタ４　讃岐（さぬき）から運び出された土器から見た交流**
**ミカタ５　土器づくりと地域差**

これらの見方を通じて、様々な弥生土器がくらしの変化に対応して生み出されたり、改良されたりした様子、また讃岐と遠く離れた地域との間で弥生人が活発に交流していた様子などを紹介します。

展覧会をご覧いただいた方々に、弥生土器が時間の流れ、地域の個性、人々の交流など、過去の様々な世界へ導いてくれること、つまり「弥生土器のミカタ（見方）」は、考古学者、いや私たちにとって未知の世界へ進んでいくための「弥生土器はミカタ（味方）」だと感じていただければ幸いです。

**さぬき市鴨部・川田遺跡で見つかった弥生土偶**
（弥生人の姿を写実的に表現）

**さぬき市鴨部・川田遺跡で見つかった弥生土器壺**
（壺は水稲耕作の始まりとともに増加した。これは壺が主に稲の種もみを貯蔵する容器として使われたため）

**善通寺市旧練兵場遺跡に運び込まれた各地の土器**（九州から関西までの地域で作られた）

## 展示のお知らせ

**テーマ展　弥生土器のミカタ－土器から読み解く弥生人のくらしと交流**
**日　時：開催中。　９月25日（水）まで**
**９時～17時　※土・日・祝日は休館（ただし８月24日(土)・９月７日（土）は開館）**
**場　所：香川県埋蔵文化財センター第２展示室**
**観覧料：無料**


**香川県埋蔵文化財センター**
https//www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
tel. 0877-48-2191　fax.0877-48-3249

一部運行止があります
詳しくはホームページをご覧ください


いにしえの讃岐　No.102　2019年(令和元年)７月発行



香川県埋蔵文化財センター情報誌

## 現地説明会を開催しました

６月29日（土）に、丸亀市の沖遺跡で現地説明会を開催しました。当日は60名の方々にお越しいただきました。梅雨の晴れ間の蒸し暑い一日となりましたが、熱心に「条里地割」と平行する方向に延びる溝状遺構や出土遺物を見学されていました。（沖遺跡の調査成果については１ページをご覧ください）

# いにしえの讃岐


NO.102

# 沖遺跡（おきいせき）の発掘調査

沖遺跡は丸亀平野の東部、丸亀市飯山町上法軍寺に所在する遺跡です。国道 438 号建設工事に伴い、平成 31 年 4 月から令和元年９月まで調査を行っています。

この遺跡では弥生時代後期から江戸時代前期の溝状遺構や多数の柱穴跡などが見つかりました。はじめに室町時代から江戸時代前期の溝状遺構について紹介します。溝状遺構は隣接する市道に平行して複数条掘られています。これらは一部が重複しており、長期間にわたって何度も掘り直されたことがわかります。

条里地割に平行する江戸時代前期の溝状遺構

弥生時代後期の河川跡

遺跡周辺の道路や田んぼを見ると１辺約109ｍ四方の碁盤（ごばん）の目状に区画されています。これは「条里地割」と呼ばれる土地区画整理の名残（なごり）です。沖遺跡で見つかった溝状遺構は周辺の条里地割に平行しています。これは土地区画が踏襲（とうしゅう）されたことによるもので江戸時代、更に現代までこの区割りに沿って土地が利用されてきたことになります。このうち最も古い溝状遺構からは鎌倉時代終わりごろの土師質土器が出土し、遅くともこの頃までにはこの付近の条里地割が施工されたことがわかりました。

条里方向に延びる溝状遺構の下からは河川跡が見つかりました。この河川跡は東西方向（付近の条里地割とは全く異なる方向）に延びています。この河川跡からは弥生時代後期の土器片や奈良・平安時代の土器片などが出土しました。

これらのことから、この付近に人間が暮らし始めたのは弥生時代後期からで、鎌倉時代終わりごろまでに条里地割が施工される以前には河川があり、周辺は河川に面した低地であったことがわかりました。

現地説明会遺物見学

これらの調査成果を広く公開するために６月 29 日に現地説明会を実施しました。（表紙も）

# 県道円座香南線建設に伴う発掘調査

県道円座香南（えんざこうなん）線は高松自動車道・高松西インターと高松空港を結ぶ道路で、高松市香南町を通る部分の建設に先立ち、路線内に遺跡が存在するかどうかの調査を平成 31 年４～令和元年６月に行いました。

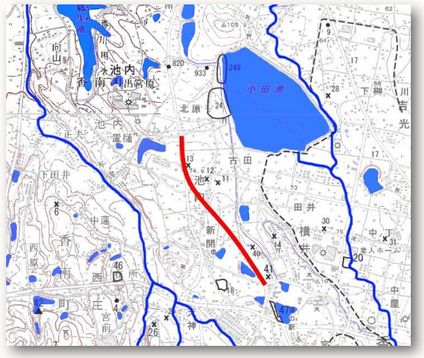
図１　調査対象地の周辺
（国土地理院1/25000図に加筆）

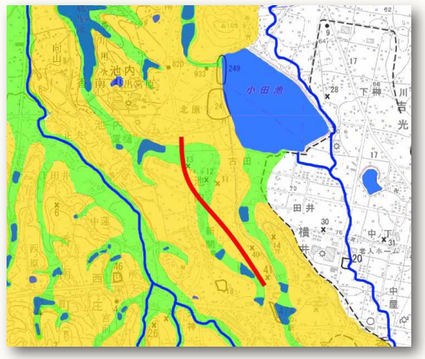
図２　地形の復元図（黄は丘陵、緑は谷）
（国土地理院1/25000図に加筆）

調査地は高松空港のやや北側で、高松平野よりも一段高い台地上に位置します。調査に先立ち、遺跡の立地と形成原因の関係を検討する手掛かりを得るため地形復元を行いました。周辺にはため池が多く、小規模な川も複数流れています（図１）。これらの位置と標高（地図の等高線）を重ねると、多くのため池が一段低い部分に連なることが見えてきます。これは台地に降った雨が台地のわずかに低いところや、土の柔らかいところを流れ続けて削られた谷にあたります。逆に削られなかった部分は相対的に丘陵となって残ります（図２）。

遺跡を考える場合、土地が固く安定した丘陵上は集落を営むのに適するのに対して、水はけの悪い谷は水田（稲作）に適します。

トレンチで見つかった柱穴跡や溝状遺構

また、丘陵上でも急傾斜の斜面部より頂部が集落を営むには向いています。

この想定を基にトレンチを設定して調査を進めたところ、丘陵上にあたる２か所で中世の柱穴跡や溝状遺構などの集落跡の一部が見つかり（左写真）、逆に谷部は人の残した痕跡がほとんどみつかりませんでした。これらの集落跡は今秋以降に改めて調査を行う予定です。